

2 アブドゥル・ラザク先生 「言葉」でマレーシアと日本をつなぐ

兵庫県立大学 環境人間学部 教授 宇高 雄志

アブドゥル・ラザク先生は、二〇一三年七月一八日にお亡くなりになりました。享年八八歳でした。広島大学より名誉博士号を授与されてから四か月あまりのことでした。

私は広島大学の工学部の助手であった二〇〇二年にマレーシア科学大学に滞在する機会に恵まれました。ラザク先生のご子息はマレーシア科学大学の副学長でした。ラザク先生は大学で開催されていた「日本文化祭」に来賓としておこしでした。

ラザク先生は、文化祭の開会式で、私に満面の笑みで「私は文理大学で勉強しました！」と声をかけていただいたのです。ラザク先生のごことは、広島大でもマレーシア科学大学でも聞いていましたが、先生との突然の出会いにとっても驚きました。

それからしばらくして、ラザク先生のお話を聞きしたいと思い、クアラルンプールの先生のご自宅に通うことになりました。最初は私が研究テーマにしているマレーシアの都市や社会のうつり変わりについてお聞きしたいと思っていたのです。

そこでお聞きした先生のお話には本当に驚かされました。

先生はまさしく、マレーシアと日本の戦後の社会のうつりかわりのただなかで、教壇に立ち続けられたことを知

II 関係者からの寄稿



アブドゥル・ラザク先生

りました。

私のあまりの驚き様に、逆に先生は驚かれたかもしれません。先生のお話をもとに拙著『南方特別留学生ラザクの「戦後」』を書くことをすすめていただいたのも、先生ご自身からでした。ちなみにこの本の出版元の南船北馬舎の陰山晶平さんも広島大のご出身です。

ラザク先生のご自宅には、長年の日本語教師としてのご活躍もあってたくさん表彰状や記念品が飾られています。すでに八〇歳になられていたラザク先生は、一つ一つの表彰状や記念写真を指差しながら、驚くほど鮮やかにそれぞれの時代の日本とマレーシアのことを思い出されていました。

そのときふと、それらの中に広島文理科大学への留学の証がないことに気がついたのです。ラザク先生も「原爆投下後の混乱でそれどころではなかったよ」と呟いておられたのが気になっていました。

その意味で、今回の広島大学からの名誉博士号の授与は、先生にとって、広島文理科大学への留学と、その後の長い道のりをふりかえる意味においても、とても大切なことだったに違いありません。先生は本当に喜ばれたと思います。

ラザク先生は一九二五年七月にマレーシア・ペナンで生まれました。不幸にも小さな頃にご両親を亡くされました。ご息子のズルキフリ先生も「父はある意味で孤児だった」とおっしゃっていました。

南方特別留学生は各国の名士の子弟を集めて教育したとの論

考も少なくないのですが、ラザク先生は、ご両親を小さいときになくされていたのです。

一方で、先生は学校へ行くのが楽しくて仕方なかったそうです。学校の教師になりたいと思われたのも小学校のころだそうです。

先生はわずか一六歳でクアラルンプールの小学校で補助教員として採用されます。その後、一九四一年以降の日本統治下に厳しい選抜と訓練を受け、南方特別留學生として東京に渡ります。その後、一九四五年四月に廣島文理科大学に留學し、学友たちとともに被爆されました。この時の経緯は、江上先生や栗原さんがお書きになられておりです。

被爆直後の混乱の中、学友たちは命を落とします。しかしラザク先生は無事、マラヤに帰国することができました。しかし帰国したラザク先生を待っていたのは敵国であった日本に「留學」していたことに対する厳しいなげかけでした。再びマラヤを占領した英国人視學官に糺されることとなります。そしてマラヤ共産党には関与しないこと。そして日本をわすれることを誓わされたといえます。幸いにもラザク先生には原爆症の影響は出ませんでした。

先生は「学校の先生はすばらしい仕事ですよ」と繰り返しおっしゃっていました。

先生の学校の教師になる夢は、南方特別留學生となっても、そして被爆後にマラヤに帰国してからも変わりありませんでした。先生は子供の時からのお夢とおなじく教職を再びめざし、多くの社会的リーダーを輩出したことでも知られる名門のスルタン・イドリス師範学校に四六年に入学されています。

先生がスルタン・イドリス師範学校で学んだころのマラヤは英領からの独立への機運が高まっていました。このころのマラヤは政治的にも熱い時代だったようです。

ラザク先生は独立にむけた学生グループの事務局長として活動します。グループの代表はのちに副首相となるガファーババ氏でした。

先生は当時の熱気を、机を手で打って思いおこされていました。

「マラヤを独立させるために一生懸命勉強しよう。インドネシアから独立に関した本をもらってみんなに配った。もちろん大東亜共栄圏の精神について友人にはなしましたよ！」

そして五七年にマラヤ連邦が独立します。マレーシア社会にとってマレー系、中国系、インド系などからなる民族間の融和は今日に至るまでの最重要課題になっています。独立以降も紆余曲折を経てマレー系の文化を国民文化として、またイスラームを国教として中軸に据え戦争で痛んだ国土の修復にかかることとなります。

そんな時代の昂揚の中、ラザク先生は師範学校を卒業後、各地の学校に勤務しながら教師の一人として、国語となったマレーシア語を教えることになりました。そしてまもなくマレーシア語の教員の養成の立場でも活躍されました。多民族社会としても国語教育は重要な課題になっていたからです。マレーシア語（マレー語）を教えることのできる教員の育成は急務でした。

先生はお会いするたびに「若者は一生懸命勉強する。一生懸命働くことが大切です」と繰り返しおっしゃっていました。もちろん先生ご自身も、教師としてまっすぐに日々の仕事にあたっておられたようです。ご息子のズルキフリ先生も、ラザク先生が日々丁寧に授業の準備をされる姿を覚えておられます。またラザク先生は、時間に厳格で、几帳面なお人柄だったそうです。一生懸命に物事にとりくむことは日本に留学していた際に交流した日本人にも学ぶところが大きかったとおっしゃっていました。南方特別留學生としての「訓練」も厳しいものでしたが先生は教員たちの姿に一生懸命さの大切さを学んだとおっしゃっていました。

先生は「言葉は道具ではありません。国をおもう精神だよ」ともおっしゃっていました。

先生の言語教授法は国内でも高く評価され七六年には都市部で放送の始まった国営テレビでマレー語の母体となるジャワイ語番組に出演されました。これで一躍有名になられたそうで「いやー照れましたよ」とカラカラ笑っておられました。

美しい言葉を使うことで、より確かに物事を考え、日々の仕事にとりくむことができるのだ。ほかの国や民族の言葉を学ぶことは異なる他者の精神を学ぶことなのだともおっしゃっていました。

多民族社会のマレーシアにはたくさんの言語があります。それぞれが大切に、それに加えて国民をつなぐマレーシア語の大切さも説いておられました。

一方、独立期を経てもしくは日本へのまなざしは厳しく、ラザク先生も日本語を使うきっかけを失っておられました。しかし先生は五七年にクアラルンプールに開設される日本大使館の職員を中心に、日本人との交流を再開されます。

「そうしないと日本語を忘れてしまうからね。家内は駐在員の家族を家に招いてマレー料理を教えたりしたよ」と微笑みながら思い出しておられました。大使館職員や企業の駐在員との交流がこうして始まったといえます。

その後、一九八一年のマハティール・モハマド政権の成立は、ラザク先生にとっても、また日本とマレーシアの関係でも大きな転換点となります。マハティール首相の肝いりで、わが国を含む東アジア諸国の発展から学ぼうとする「ルックイースト政策」がすすめられることとなります。ここでのおおくのマレーシアの若者が国内で日本語教育を受けたのちに、日本の大学や工業高専、また自動車産業をはじめとする工業分野で学ぶことになったのです。これにはもちろん広島大学も含まれます。

そこでラザク先生は大学に設置された日本語教育コースの主任として抜擢されることになりました。

「私はこの（日本語教育）プログラムが好きですよ。たくさん若い人が六ヶ月間日本語を勉強して、日本に行って日本のよいところを学んだ。日本人の親切なところを学ぶことになった」

これがまさしく日本とマレーシアの交流元年ともなりました。またマレーシアの経済成長が進む時期がこの時期です。日本企業のマレーシア進出とマレーシア人の日本熱に拍車がかかります。

中曽根元首相のマレーシア訪問時に先生は叙勲されます。また先生も広島市を再訪し被爆者手帳を受領したりしています。マレーシア国立国語図書研究所から先生の体験を取り上げた『広島の灰』が刊行されるのもこのころです。

名声を得た先生は、かわらず教壇に立ち、日本語を教えることに喜びに感じておられたようです。

「日本語は美しい言葉です」と繰り返しおっしゃっていました。先生の日本語もとても気品がありました。先生は日本語をいつかはマレーシアの第二公用語にしたいと思われていたそうです。日本で覚えた歌も歌っておられました。

当時、日本語クラスの同僚教師のリーダー格として先生は忙しい日々を過ごされていました。当時の同僚教師の回想でもラザク先生の講義の準備の完璧さや、学生指導、同僚への細やかな気配りにはみな感嘆しておっしゃっていました。

こうして日本語教育を担いながら両国の国際交流の架け橋となったラザク氏は、九七年に大学を退官されました。自宅の隣にあるモスクのイマーム（導師）などをつとめられました。

先生は南方特別留学生となつてからもイスラーム教徒としての信仰を大切にしてくださいました。「イスラームの

教えにすべてしたがって生きてきた。イスラームはよいことを教えてくれる」とおっしゃっていました。

そして折々に広島での経験をマレーシアの若い人たちに語り継いできました。それでも先生はマレーシア人が「すっかり昔とはかわってしまった」と嘆いておられました。

マレーシア社会は著しい経済成長もあって変化が著しいのは事実です。またグローバリゼーションの流れを受けて学校教育でも近年ではマレーシア語から英語への転換を迎えつつあります。晩年のラザク先生はこうした時代の流れを冷静に見つめておられました。

マラヤ独立から、国家の成長の目撃者として、先生は「マレーシア語の精神はかわらない。マレーシア語は国語だから。第二外国語として英語は大切だから……」とおっしゃっていたのが印象的でした。

その一方で、先生はお会いするたびに広島と広島大学について懐かしそうにお話をなさっていました。一九九〇年代に相次いで広島に「里帰り」された先生は本当にうれしかったとおっしゃっていました。

「広島は変わりましたね。私は広島へ行つて、広島は新しい広島になったと思った。（原爆を受けた当時は）何もなかった。今は建物も新しくなった。前とはずいぶんと違う。これはいいことだと思った。よくなりましたよ」

広島のと、昔の写真を見ながら、ラザク先生は広島のことを思い出されていました。栗原明子さんや広島で寄宿した興南寮のことも懐かしそうにお話になっていました。

宇高雄志・兵庫県立大学環境人間学部教授。建築学を専攻。一九九七年から二〇〇五年まで広島大学工学部に勤務。ラザク氏のご息子が副学長を勤めたマレーシア科学大学に研究員として滞在。国連訓練調査研究所・広島事務所（UNITAR）世界遺産保全トレーニングにも協力参加した。著書に、『南方特別留学生ラザクの「戦後」南船北馬舎刊、二〇一二年、など』。